

## また来年

農家は収穫を終えたあと、結果が良くても悪くても、反省を込めて「また来年」とよく言います。

この、また来年は、昔から農業に従事していた人達から生まれた言葉だ。農業では全力を尽くしても、異常気象や病虫害の大発生等で、意図せぬ状況により無念の思いに至ることが多々あったからだ。

そして、また来年には、今年の喜び、無念さ、反省を一度リセットして、新しい年への意気込みも含んでいる。

○九年のぶどう栽培は、春先のよい天気に恵まれ順調に生育した。七月初め、袋掛けの時期には粒も大きくなり、品評会に出品しても入賞するのではと思われるほど、大粒で立派なぶどうが並んだ。「今年は立派なぶどうができそう。腕が上がったのかな。収穫が楽しみです」

出会う人々に、私は胸をはって自信の程を語った。

しかし梅雨がなかなか明けない。多くは降らないが、シトシト雨が続いた。七月が過ぎ、八月二日観測史上最も遅い梅雨が明けた。

その頃からぶどうに被せた袋が赤く汚れてきた。ぶどうの粒がはじけたのだ。ぶどうは、粒が大きくなる時期に大きな雨が降り、急激に水分を吸収すると粒がはじけることがある。

はじける時期は二回あり、一回目はまだ粒が青い時期である。このとき、はじけた破断面にすぐ膜がはり、傷口が直るようによく治まってしまふ。このためはじけた粒が不良となるだけで、収穫の袋詰め時に取り除けば被害は少しく済む。

二回目は色づき始めたときだ、はじけた粒から果汁が流れ出し、止らない。はじけた粒は腐りはじめ、その果汁が周りの粒にかかる、腐りが房全体に広がっていく。また腐敗臭にさそわれて小さな虫が袋の下の穴から入り、腐りが加速する。

袋の汚れが見え始めたときにはもう遅い、袋を取ると大半が腐っている。

早出しのため枝の芽に袋を被せたベリーAの被害が大きく、切り落としたぶどうの袋が一面に散らばり、敷き藁の上がぶどうの袋で真っ白という状況になった。最終的に摘果した数は五〇〇房を超えた。

続いて皮の薄い藤稔（ふじみのり）の袋が汚れだした。藤稔は、袋掛けのときからびつくりする程の大粒で、期待も大きかっただけに無念さが募った。六五〇枚の袋掛けをしたが収穫はごく少し。全滅に近かった。このため販売でも藤稔の看板を上げる事ができず、大きく売上が減少した。

このような状況は私のぶどう園だけかと思つたが、どこのぶどう農家も程度の差はあれ似たようで、ぶどう作りを長くやっているが、このようなことは初めてと言われる方が多い最悪の年となつた。

農家によって少しだが、被害に差があるのは何故だろう。原因究明がこのような異常気象時の対策になるのではないか。

私は篤農家といわれる方々にそれとなく聞いて回った。これといった画期的なものは見出せなかったが、ある人が「この頃手抜き栽培をする人が多い。基本に返って愚直にぶどう作りをしなれば」と言った。私には耳が痛かった。

少し手を広げすぎているかもしれない。

い。それが基本を無視し、手抜きをする原因になっていのか。七五歳までやろうと決めたぶどうの栽培。少し肩の力を抜いて。  
また来年。

○九年十一月